シーワールドのアニマル達

●カマイルカの「サム」

イルカパフォーマンスで活躍しているカマイルカの「サム」は、今年で飼育20年目を迎えました。日本の水族館では現在、19館で約85頭のカマイルカが飼育されていて、バンドウイルカとともに親しまれています。カマイルカは、バンドウイルカと比べると動作がすばやくジャンプ能力がすぐれていますが、性格は少し臆病なところがあります。白と黒の美しい体色から、時々お客様からは「シャチの子供ですか？」とたずねられることがあります。名前は背びれの形が「草苅り鎌（かま）」に似ているところから由来しています。「サム」は、1983年5月、千葉県の岩井からやって来ました。次々と演技を覚え、翌年にはパフォーマンスにデビューしていますが、その頃の「サム」は、トレーナーの言うことをきかない元気いっぱいのわんぱく坊主で、他のイルカにちょっかいをかけたり、そのくせ注意するといじけたり、そのやんちゃぶりでトレーナーを困らせていました。今では人気・実力ともに当館トップクラスで、パフォーマンスに臨む姿はスターの貫禄さえあります。これからもますます技に磨きをかけ、世界のスーパースターをめざす「サム」に大きな拍手をお願いします。

（井上 聰）

▲カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens*「サム」のボールキャリング

●ヒカリキンメダイ

トロピカルアイランドでは発光する魚、ヒカリキンメダイを展示しています。サンゴ礁の水中洞窟など暗闇で生活するヒカリキンメダイは、眼の下にあるそら豆のような形の発光器を反転させて光を点滅させます。発光は、仲間に自分の存在を知らせたり、エサをおびき寄せる効果があるのではないかと考えられています。

これまでヒカリキンメダイの展示では、さまざまな課題がありました。それは、水槽を暗くすると発光は見れても姿や形が見にくくなったり、逆に水槽を明るくすると暗い所を好むヒカリキンメダイは、明るい展示ガラスの近くに出て来てくれません。また、長期間飼育すると発光が弱くなる傾向もありました。ヒカリキンメダイの行動を観察したところ、エサを捕るときは明るいところにも出て来ることや発光回数もいつもより多くなることがわかりました。試行錯誤の結果、展示ガラスの近くで活きたプランクトン（ブラインシュリンプ）を絶えず与えることで、ヒカリキンメダイの発光する様子を展示できるようになりました。しかしこのヒカリキンメダイの発光展示を続けるには、大量のブラインシュリンプを育てることが必要で、係員はエサの準備におわれています。

（森 一行）

▲ヒカリキンメダイ *Anomalops katoptron* の美しい発光

さかまた No.61 （禁無断転載）

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470) 93-4803

http://www.kamogawa-seaworld.jp

発行日 平成15年 7月

さかまた

鴨川シーワールド NO. 61

水族館での保護活動
ーコマッコウがやってきたー

▲相ついで保護されたコマッコウ（左）とハナゴンドウ（右）

たくさんの人が訪れる水族館の主な役割は、「海の動物」の素晴らしさを展示やパフォーマンスを通じて知ってもらうことですが、あまり知られていない役割の一つに、弱って動けなくなっている海の動物を救助する活動があります。

座　礁　海を泳いでいるイルカやクジラが海岸に打ちあがってしまうことを座礁（ストランディング）といい、集団と単独の2つの場合があります。集団座礁の原因は、群れのリーダーが迷って群れごと座礁する、地球の磁場が影響している、体の中の寄生虫が方向感覚を狂わせるなどの説があります。一方、単独座礁は、けがや病気で体が弱ってしまうなど、その動物自体に原因があるのです。このようにイルカやクジラが海岸に打ち上げられると、近くの水族館は連絡を受けることがあり、収容可能な大きさで、しかも生きている場合には水族館で保護することがあります。しかし、泳げなくなり海岸に打ち上げられるわけですから、これはもう相当な重病人（？）です。過去にも何例かこのようなイルカを保護したことはありますが、輸送中に死んでしまったり、プールに入れても自分で泳ぐことも出来ないまま、死んでしまう場合が多いのです。

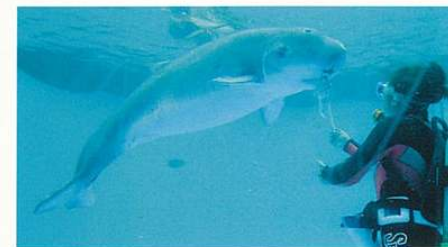
コマッコウがやって来た　台風のような嵐が吹き荒れた翌日の1月28日に、近くの安房郡和田町にイルカが座礁していると連絡を受けました。イルカを運ぶ時のタンカ、記録用紙、処置薬品、体温計、カメラなどをたずさえトラックで駆けつけると、河口に打ち上げられたというそのイルカはすでに漁港の活魚水槽に移されていました。種類は、その独特な顔つきや背びれの形から以前にも保護したことのある「コマッコウ」と分かりました。しかも、まだ体が小さく子供のようで、弱々しく息をしていました。さっそく、トラックに乗せて水族館に運び、体長、体重の測定、採血、抗生物質の注射を行いました。その体表には、直径5cmほどの真ん丸の傷が数箇所あり、一部の傷口からは膿が吹き出てきました。そこで、急いで傷口の手当てを済ませプールに入れました。

▲背びれの後に見られるダルマザメの咬傷（保護当日）

可動床の威力　このような「重病人」イルカを保護した時に威力を発揮したのが「可動式の床」でした。この仕組みはプールの底が二重になっていて、ボタン一つで、スノコ状の床がせりあがるというものです。コマッコウは初めうまく泳げなかったので、溺れない様に水深を浅くした状態で飼育し、傷の手当て、水分不足を補うための処置（特製ホースを用いて水を飲ませる）や、主食のイカを飲み込む練習を行いました。この甲斐あってか、保護3日目には自分でイカを飲み込むようになり、次第に遊泳もできるようになったのです。そこで水深を徐々に深くし、傷の手当てをする時だけ水深を浅くするようにしました。体表の傷は、ダルマザメという深海に住む体長50ｃｍほどのサメによる噛み傷と判明しました。皮膚に食いつき体を回転させて肉を食いちぎるというもので、これで体のあちこちについた円形の傷の謎が解けました。この傷の消毒をほぼ毎日行い、およそ3ヶ月かかって傷口はほとんどきれいにふさがりました。しかし、頭部の深い傷はまだ完治していないので今も手当てが続いています。

▲プールを浅く（水深60cm）しての傷の手当て

不思議な習性　コマッコウは、沖合に住んでいてその姿を見る機会は座礁した場合がほとんどなので、生きた姿を見ることはめったにない種類です。その習性としてタコやイカのように大量の煙幕（排便）を出すことが知られています。このものすごさを実感したのは、1988年に保護し19日間生存した個体の時でした。朝、飼育施設に行ってみるとプールの水は赤茶色に染まり何も見えない状態でびっくりさせられたものです。今回のコマッコウでは、治療のために係員が捕まえようとしたり、他のイルカをプールに入れた時など、危険を感じたりびっくりした際にこの煙幕を出すことがしばしば観察されました。そしてその中に身を隠すなどより詳しい行動を観察することも出来ました。また、コマッコウには擬鰓（ぎさい）と呼ばれる鰓（えら）の模様が目の後ろにありサメを思わせる顔つきをしています。おとなしい生き物であるがために、海で生きて行くための術を身につけているのかも・・・と思うと、自然の不思議を感じずにはいられません。

▲煙幕（排便）に身をかくすコマッコウ

▲ダイバーに接近しイカを食べるコマッコウ。擬鰓に注目

ハナゴンドウもやってきた　4月19日にはハナゴンドウが、鴨川から車で１時間ほどの館山市の塩見漁港で保護され、コマッコウの仲間入りをしました。ハナゴンドウはいくつかの水族館でも飼育されている種類です。保護した時は通常36℃ある体温が29℃と著しく低く、外傷はないものの非常にやせて衰弱していました。保護してから数日で少しずつ主食のイカを食べるようになりましたが、まったく泳ぐことが出来ずに水面にじっと浮いたままで、これは助からないと思われる状態が続きました。しかし、懸命な治療の結果、10日目頃から危機を脱出したようで、自力で泳いだり、近づいてくるコマッコウを寄せ付けまいと威嚇するなど気の強いところを見せるようになりました。立て続けに保護された2頭の“珍客”はバンドウイルカと同居できるまで体力がついてきましたが、まだ完全に回復したわけではありません。

これからは傷や体調の回復を図りつつ、様々な貴重な記録を残してほしいと願っています。

（勝俣 悦子）

▲塩見漁港の浅瀬に座礁したハナゴンドウ

トピックス

日本初!!

カスピカイアザラシの赤ちゃん誕生

▲新生児毛におおわれている（生後7日目）

平成15年4月25日に、カスピカイアザラシのオスの赤ちゃんが誕生しました。飼育下でのカスピカイアザラシの出産は大変珍しく、日本では初めて、世界でもカザフスタン共和国の動物園で１例が報告されているだけです。父親は「レム」、母親は「ベラ」、共に年齢は10才で1993年に搬入されました。「ベラ」は初めての出産だったためか赤ちゃんに関心を示さず、母乳を与えようとしなかったため、翌26日より人工保育を開始しました。

生まれたばかりの小さな赤ちゃんは全身が淡い黄色のフワフワした新生児毛でおおわれていました。人工保育開始当日から哺乳ビンの特製ミルクを飲み始め、その後は１日に600～900ccのミルクを飲んで成長していきました。

▲親代りの係員のヒザの上でミルクをもらう（生後2日目）

12日目からは、小さいプールの中で泳ぐ練習も行い、日に日に上手になりました。９日目から始まった換毛は32日目には終了し、親と同じ体色と

▲換毛が進み、親と同じ模様が見えはじめた（生後26日目）

なり、体重も生まれた時の4.9kgから8.1kgまで増えました。また、一般公開は体調が安定した５月10日（15日目）から行っていますが、今では元気いっぱいにプールを泳ぎ回っている姿や餌をもらうところなども見ることができます。愛称は7,887通もの応募の中から「カピ」と決まりました。

皆様も是非、この愛らしいカスピカイアザラシの赤ちゃんを見に来て下さい。

（野口 圭子）

鴨川生まれのバンドウイルカが沖縄へ引っ越し

▲親離れも終ったレマとスカイ

鴨川シーワールドで生まれたバンドウイルカの子供2頭が、昨年の12月9日に沖縄美ら海水族館へ引っ越しました。

沖縄美ら海水族館は、国営沖縄記念公園水族館の後を受けて昨年11月にオープンした世界最大級の水族館で、当館とはこれまでに生物交換や技術交流を続けてきました。今回のイルカの引っ越しは新水族館のオープンを祝福して実現したものです。

２頭のバンドウイルカは1999年８月と10月に相次いで誕生し話題を呼んだ「レマ」（メス）と「スカイ」（オス）でともに3才です。まだ母親と一緒のプールで暮らしていましたが、ちょうど親離れの時期でもあるため、親の見える隣のプールに移動し、イルカたちの様子を見ながら精神面の引っ越し準備も慎重に進められました。

▲トラック上のコンテナへ積み込まれ、明け方雪が降り始めた鴨川を出発

レマとスカイは朝6時に鴨川を出発しましたが、引っ越し当日は、南房総では珍しい大雪のため輸送トラックが思うように進めず予定より大幅に遅れ、出発してから16時間後に無事沖縄へ到着しました。プールに入れられたレマとスカイは長旅の疲れも見せず元気よく泳ぎ始め、輸送に付き添った係員一同ホッとしました。

日本の水族館でのバンドウイルカの年間繁殖数は5頭から10頭と少なく、飼育下で繁殖したイルカが他の水族館へ輸送されることは大変珍しいことです。鴨川で生まれたこれらのイルカたちが、沖縄の新居で元気に育ってくれることを願っています。

（佐伯 宏美）

▲一夜明け、沖縄の新居で元気な姿のレマとスカイ

モラ　モラ

●サンゴ礁魚類のフィーディングタイム

平成15年3月20日からトロピカルアイランドで「サンゴ礁魚類のフィーディングタイム」を始めました。ダイバーによる水中給餌を見ながら、解説員が魚たちのエサの食べ方や飼育のエピソードなどを紹介し好評を得ています。小さなクマザサハナムロから大きなアカシュモクザメやマダラトビエイなど40種類1,000尾の魚たちがダイバーのまわりに群れる光景は見応えたっぷりです。なかにはダイバーにもすっかり慣れて、手元からエサを食べる魚も少なくありません。エサを食べている魚たちは活発に泳ぎ、いつもと違う表情を見せてくれます。普段の姿と見比べてみるときっと新しい発見があると思いますので是非ご覧下さい。　（小川 泰史）

●セイウチ「キック」の婿入り

セイウチのキックは平成９年5月、タックとムックの次男として生まれました。幼い頃は甘えん坊でしたが、平成12年に妹のミックが誕生してからは、親離れもし、セイウチの特徴である2本の牙（犬歯）ものび、男らしく成長してきました。そんなキックに婿入りの話が持ちあがったのは5歳を迎えた頃でした。相手は、愛知県にある南知多ビーチランドの箱入り娘「さくら」（当時4歳）です。キックの輸送は今年の1月30日に行われました。別れはさみしいものですが、「さくら」とは年齢も近く、将来を考えるとキックにとっては最高の環境だと思われます。キック二世に会える日を今から心待ちにしています。　（小林 夕希栄）

●恒例、鹿島槍スキー場にペンギン大使

平成14年12月21日～12月29日と平成15年３月15日～3月23日の2回、長野県大町市のサンアルピナ鹿島槍スキー場で行われたペンギンスノーフェスティバルに、鴨川シーワールドから３羽のオウサマペンギンと2羽のジェンツーペンギンが参加しました。この「ペンギン大使」は、鴨川市と観光姉妹都市提携を結んでいる大町市への親善大使として、平成7年に行われたのがきっかけで、今ではすっかり恒例行事となり、ペンギンに会うのを楽しみにしているスキーヤーも多くいます。一方のペンギンはというと慣れたもので、そろってゲレンデを行進したり、一緒に記念写真に写ったりと、立派に大使としての役目を果たしていました。　（村松 政之）

●続、マンボウの回遊調査

モントレーベイ水族館（アメリカ）他と共同でマンボウの回遊調査を継続中です。平成13年4月にサテライトタグ（人工衛星標識）を付けたマンボウ3尾を放流し、その内1尾が6ヶ月後に青森県白糠沖で再捕され、回収された標識からはマンボウの潜水深度、水温、回遊ルートなどの貴重なデータを得ることができました。詳細は現在、分析中ですが、この成果をうけて平成15年4月に2回目の標識放流を行ったものです。鴨川市漁業協同組合の全面的な支援を得て、定置網で捕獲されたマンボウ2尾（体長99 cm、102 cm）にサテライトタグを付けて鴨川沖の黒潮海域に放流しました。謎の多いマンボウの生態解明が期待されます。　（中坪 俊之）